

醍醐寺彫刻所在確認調査について

副島 弘道

はじめに

京都市東南部の滋賀県との境近くに位置する笠取山の山上から、その西麓にかけて広大な寺地を占める醍醐寺は、平安時代前期九世紀後半に、真言宗の高僧聖宝（八三〇—九〇九）によって創建された古刹である。聖宝がはじめに建てた准胝堂、如意輪堂および彼の没後まもなく完成した薬師堂、五大堂を中心とする山上の上醍醐と、延長四年（九二六）に完成された釈迦堂を中心とする山麓の下醍醐の二つの寺域には、その後の各時代を通じて数多くの堂塔や子院が建てられた。現在の諸堂は、下醍醐の五重塔をのぞいて多く再建されたものに替わっているが、山内にはなお多数の文化財が所蔵

されている。

醍醐寺の彫刻は一件が国宝、一五件が重要文化財に指定されている。それ以外の作品については、未報告のものが多し。醍醐寺当局では一九九三年度から数年次の予定で寺内の美術工芸品の調査、記録事業を開始し、初年度には彫刻の所在確認調査が行なわれた。詳しい結果は、本格的な調査と撮影の終了後にまとめられる予定だが、ここでは実際に所在確認調査を担当した者の立場から、存在が確認された作品を報告し、簡単な解説を加える。データは十分とは言いがたいが、今後の調査、研究の基礎資料となれば幸いである。中間報告の発表を許可された醍醐寺当局に深謝申し上げる。

一 調査結果

醍醐寺の彫刻のいくつかについては、すでに調査に基づいた報告、論考などが刊行されている。主なものは後述の解説中に紹介するが、それ以外に、文化庁美術工芸課の彫刻部門によって数回の調査が行なわれている。近年では一九八〇年十月に鷲塚泰光氏、中村康氏による五大堂、如意輪堂、講堂など所在の約一〇件の調査、一九八七年十月に重要社寺調査

分は以下のとおりである。

凡例 醍醐寺に現存する彫刻を下醍醐、上醍醐の堂字順に掲げる。◎は重要文化財、○は国宝。仮番号は調査時の整理番号で本リストと直接の関係はない。時代区

平安前期 延暦三年(七八四)―天曆元年(九四七)
 鎌倉前期 文治元年(一一八五)―康元元年(一二五六)
 南北朝 元弘三年(一一三三)―明德三年(一三九二)
 桃山 永禄十一年(一五六八)―元和元年(一六一五)

平安後期 天曆元年(九四七)―文治元年(一一八五)
 鎌倉後期 康元元年(一二五六)―元弘三年(一一三三)
 室町 明德三年(一三九二)―永禄十一年(一五六八)
 江戸 元和元年(一六一五)―明治元年(一八六八)

(番号) (名称) (像高cm) (安置堂宇) (時代) (備考) (仮番号)

1 ◎木造業師如来及び両脇侍像(三軀)

木造業師如来坐像
 木造日光菩薩立像
 木造月光菩薩立像

一三〇・七
 一四五・四
 一四五・二

鎌倉前期 中尊 和歌山満願寺から移安
 鎌倉前期 左脇侍 和歌山満願寺から移安
 鎌倉前期 右脇侍 和歌山満願寺から移安

25―1―1
 25―1―2
 25―1―3

2 木造四天王立像(四軀)

木造持国天立像
 木造增長天立像
 木造広目天立像
 木造多聞天立像

一九九・五
 二〇六・八
 二〇一・七
 二〇〇・〇

慶長五(一六〇〇)か 醍醐寺新要録
 慶長五(一六〇〇)か 醍醐寺新要録 持国天像と同伴
 鎌倉前期 和歌山満願寺から移安
 鎌倉前期 和歌山満願寺から移安

25―2―1
 25―2―2
 25―2―3
 25―2―4

の一環として松島健氏、副島による霊宝館、金堂など所在の一件の調査、一九八八年六月に同じく中村康氏、根立研介氏による伝法学院、大師堂、霊宝館新館など所在の約二〇件の調査が行なわれた。今回の調査ではこれら従来の報告、成果から多くの教示をうけた。

今年度の調査は一九九三年八月十七日から二十二日まで行ない、醍醐寺寺務所の多大な協力を得て次のリスト中の作品をすべて実査し、簡単な撮影を行なった。下醍醐諸堂の調査時に本学科四年生の今村陽子、益田佳苗両氏が参加した。

31 木造大日如来坐像(金剛界) 九一・三 伝法学院 平安後期 寛文十三(一六七三)大修理 像底銘

木造不動明王坐像 八二・五 伝法学院

木造矜羯羅童子立像 九三・三 平安後期 玉眼後補

木造勢吒迦童子立像 九四・一 平安後期 左脇侍

木造愛染明王坐像 五五・五 平安後期 右脇侍

木造深沙大得立像 六二・〇 享保元(一七一〇) 法橋立乗作 光背裏、台座裏銘

木造五大明王像(五軀) 五二・九 江戶 不動堂

木造不動明王踏下げ像 八九・〇 室町

木造降三世明王立像 八五・二 江戶

木造軍荼利明王立像 五一・二 江戶

木造大威德明王坐像 八五・三 江戶

木造金剛夜叉明王立像 九八・六 鎌倉後期

木造阿弥陀如来立像 一〇五・五 平安前期

木造大日如来坐像(金剛界) 六〇・二 平安前期

銅造阿弥陀如来坐像 一九・二 平安前期

木造地藏菩薩立像 一六三・六 鎌倉後期

木造不動明王坐像 五九・四 建仁三(一一〇三)

木造五大明王像(五軀) 八六・三 快慶作 像内銘

木造不動明王坐像 一二・三 平安前期

木造降三世明王立像 一二・三 平安前期

木造軍荼利明王立像 一五・八 平安前期

木造大威德明王坐像 八〇・三 平安前期

木造金剛夜叉明王立像 一六・七 平安前期

木造如意輪觀音坐像 四九・六 平安後期

木造吉祥天立像 一六七・三 平安後期

木造阿弥陀如来坐像 八六・四 平安後期

木造閻魔天騎牛像 九三・四 平安後期

鐵造菩薩坐像 一〇〇 待賢門院御仏か 像背部銘(未読)

木造千手觀音立像 一九一・〇 天徳年間(九五七一九六)上醍醐觀音堂旧像

木造釈迦如来及び兩脇侍像(三軀) 五一・一 平安後期 中尊

49 48 47 46 45 44 43

42 41 40 39 38 37 36

35 34 33

木造不動明王及び兩脇侍像 (三軀)

◎木造不動明王坐像

八八・三

理性院本堂

平安後期

中尊

2 1 1 1 1

木造矜羯羅童子立像

六一・九

江戶

江戶

左脇侍

2 1 1 1 2

木造勢吒迦童子立像

六三・一

江戶

鎌倉前期

右脇侍

2 1 1 1 3

木造天部立像

一三一・〇

理性院本堂

江戶

本尊 三邪鬼二獅子付属

2 2 2

木造大元帥明王立像

一〇一・〇

理性院本堂

慶応元 (一八六五)

松本康慶作 像底納銘 観音経納入

2 3 2

木造十一面観音立像

四三三・〇

理性院本堂左脇の間

江戶

本尊

2 4 2

木造阿弥陀如来立像

五二・〇

理性院本堂左脇の間

江戶

像

2 5 2

◎木造不动明王立像 (厨子入)

二九・五

理性院本堂左脇の間

江戶

像

2 6 2

木造弘法大師坐像

一六・五

理性院本堂左脇の間

中国明清時代

練物併用

3 1 3

木造千手観音坐像

五七・〇

理性院聖天堂

江戶

台座裏銘に信 (カ) 栄の名がある

3 2 3

銅造聖天像

一一・二

閉山堂

鎌倉後期

宝永三 (二七〇六) 頭部納入品

10 2 10

◎木造理源大師坐像

八三・〇

閉山堂

江戶

89と一具

10 3 10

木造観賢正坐像

八五・〇

閉山堂

江戶

像

11 1 11

◎木造業師如来坐像

一七六・一

業師堂

延喜十三 (九一三)

中尊

11 1 1 1 1

木造日光菩薩立像

一一九・九

業師堂

延喜十三 (九一三)

左脇侍

11 1 1 2

木造月光菩薩立像

二二〇・九

如意輪堂

延喜十三 (九一三)

右脇侍

11 1 1 3

木造狛犬

六一・二

如意輪堂

江戶

閉口 他一軀の後肢残欠あり

11 2 11

木造如意輪観音坐像

九〇・三

如意輪堂左脇の間

文化四 (一八〇七)

像内銘

12 1 12

木造毘沙門天立像

八九・〇

如意輪堂右脇の間

慶長十三 (一六〇八)

か文化四 (一八〇七) 修理 像内銘

12 2 12

木造吉祥天立像

九〇

如意輪堂右脇の間

慶長十三 (一六〇八)

像

12 3 12

木造阿弥陀如来坐像

六一・三

如意輪堂右脇の間

鎌倉後期

現在 96 の左脇侍

12 4 12

木造観音菩薩立像

一一五・〇

如意輪堂右脇の間

平安後期

現在 96 の右脇侍

12 5 12

木造勢至菩薩立像

一〇三・二

五大堂

平安後期

像

12 5 1 1

木造五大明王像 (五軀)

一三七・〇

五大堂

慶長十三 (一六〇八)

醍醐寺新要録

13 1 1 1 1

木造不动明王坐像

一七三・五

醍醐寺新要録

慶長十三 (一六〇八)

醍醐寺新要録

13 1 1 1 3

木造軍荼利明王立像

一七〇・〇

醍醐寺新要録

慶長十三 (一六〇八)

醍醐寺新要録

13 1 1 4 3

木造大威徳明王坐像

一二七・三

醍醐寺新要録

延喜十三 (九一三)

醍醐寺新要録

13 1 1 5 4

木造金剛夜叉明王立像

一七七・五

醍醐寺新要録

慶長十三 (一六〇八)

醍醐寺新要録

13 1 1 2 2

所載の大治五年（一一三〇）に僧定海が造立した薬師堂安置像の可能性が強く、その造立願文の案文とみられるものが存在する。仁王門の金剛力士像【図12（17）】は『醍醐寺新要録』の記述と像内に記された修理銘から、長承三年（一一三四）仏師勢増、仁増作であることが知られる。靈宝館新館の閻魔天騎牛像【図13（46）】は『醍醐雜事記』所載の薬師堂の待賢門院（天治元年（一一二四）院号宣下、久安元年（一一一四五）没）の御座のための像の可能性がある。平成元年に重要文化財に指定された理性院の不動明王像【図14（79）】は、一木造の古様な構造であるが、作風からは十一世紀後半頃の製作とみられる。¹² 大講堂本尊の定朝様の丈六阿弥陀如来像

【図15（3）】はもと上醍醐にあったというが、当初の堂は不明である。大講堂不動明王像【図16（7）】は十一世紀末、十二世紀初め頃の秀作だが、この像の当初の脇侍像が、現在伝法学院に安置されている不動三尊像【図17（32）】の脇侍二童子像であり、定海が造立に関係した可能性を考える説が今年度本学に卒業論文として提出された。¹³ 三宝院行者堂の釈迦三尊像【図18（15）】も定朝様の秀作で、当初の台座である獅子、象を完備する。靈宝館新館の木造阿弥陀如来坐像【図19（45）】と銅造阿弥陀如来坐像【図20（39）】、靈宝館本館の釈迦三尊像【図21（49）】、上醍醐如意輪堂の観音、勢至菩薩立像【図22（97）】はいずれも定朝様の作風を示す中央作であ

る。靈宝館本館の阿弥陀如来坐像【図23（56）】は十二世紀後半の定朝様の作であるが、玉眼が嵌入されていることが珍しい。この他の十二世紀頃の作に、伝法学院の金剛界大日如来像、報恩院阿弥陀如来像、靈宝館北倉の弥勒菩薩像があるが、いずれも後世の補修を経ている。

三宝院弥勒菩薩像【図24（10）】は座主勝賢が発願し建久三年（一一九二）に仏師快慶が造立した像で、X線透視によって頭部内に五輪塔と経巻状の納入品が認められる。『醍醐寺新要録』などによると、同じ年に没した後白河上皇の追善像として上醍醐覚洞院護摩堂に安置されたものと推定される。¹⁴

靈宝館新館の不動明王像【図25（41）】は建仁三年（一一二〇）三）仏師快慶作の鎌倉前期の基準作である。¹⁵ 金堂の薬師三尊像【図26（1）】は『醍醐寺新要録』によって桃山時代の慶長三年（一五九八）に和歌山満願寺から、同じ金堂の四天王のうちのおそらく広目天、多聞天像【図27 c d（2）】とともに移されたことが知られる。¹⁶ この他の鎌倉前期の作品として理性院天部立像【図28（80）】、三宝院聖天堂の檀像風の十一面観音立像【図29（16）】がある。¹⁷

上醍醐開山堂の本尊理源大師（聖宝）像【図30（88）】は、『醍醐寺新要録』の記述から弘長元年（一二六一）の造立と考えられる。¹⁸ 修証殿客仏の阿弥陀如来立像【図31（36）】と、その脇侍像とみられる現在仁王門の二階に置かれた菩薩立像



图 2 b (91)



图 2 a (91)



图 1 (72)

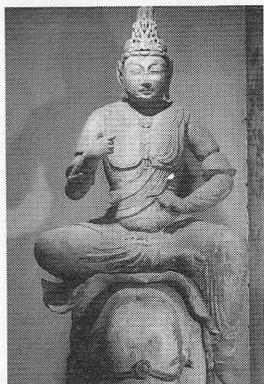


图 4 (37)



图 3 (98)



图 2 c (91)



图 7 (38)



图 6 (54)



图 5 (42)



图10 (43)



图9 (53)

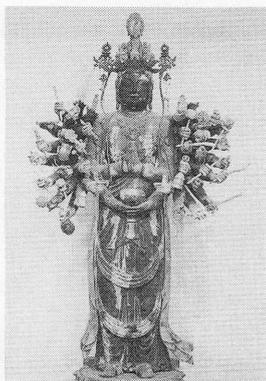


图8 (48)



图12 b (17)

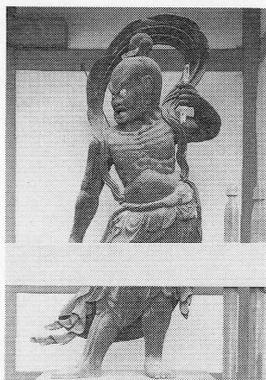


图12 a (17)



图11 (44)



图15 (3)



图14 (79)



图13 (46)



图17 b (32)

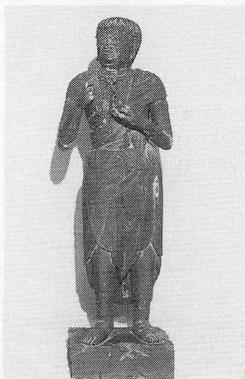


图17 a (32)



图16 (7)



图18 b (15)



图18 a (15)



图17 c (32)

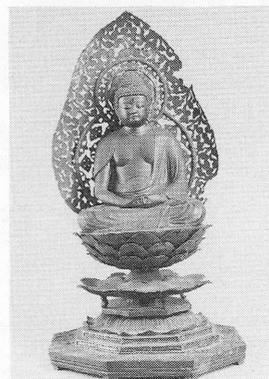


图20 (39)



图19 (45)



图18 c (15)



图21 c (49)



图21 b (49)



图21 a (49)

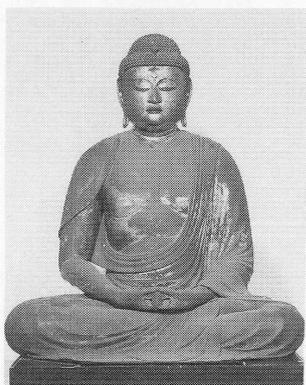


图23 (56)



图22 b (97)



图22 a (97)



图26 a (1)



图25 (41)



图24 (10)



图27 a (2)



图26 c (1)



图26 b (1)



图27 d (2)



图27 c (2)



图27 b (2)

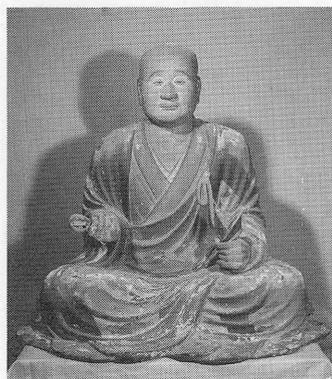


图30 (88)



图29 (16)



图28 (80)



図33 (51)

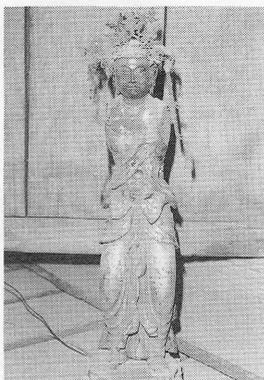


図32 (21)



図31 (36)

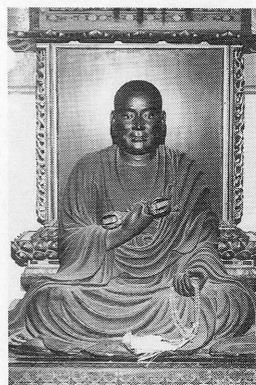


図36 a (11)



図35 (55)



図34 (96)



図37 (29)



図36 b (12)

【図32 (21)】は、いずれも十三世紀後半の作風を示すが、当初の安置堂宇などは不明である。その他鎌倉後期とみられる作品に靈宝館新館の地藏菩薩立像、靈宝館本館の如意輪觀音坐像【図33 (51)】、如意輪堂の阿弥陀如来坐像【図34 (96)】、靈宝館北倉の天部立像と狛犬がある。

南北朝、室町、桃山時代の彫刻は少ない。靈宝館本館の塑造弘法大師像【図35 (55)】は銘文に永正十三年（一五一六）の年紀と、法印宗永、東寺宝嚴院為源の名がある。金堂四天王像のうち持国天、增長天像【図27 a b (2)】は運動感のある大造りな表現から平安前期の製作を考える説があるが、現状の観察では慶長三年（一五九八）金堂移築時の復興像と思われる。あるいは一部に古材を利用しているのであろうか。

江戸時代の彫刻は多いが、その中では仏師吉野右京による一群の肖像が目立つ。すなわち、三宝院弥勒堂の弘法大師、理源大師像【図36 (11、12)】は寛文七年（一六六七）および五年、上醍醐地藏堂の弘法大師像は同七年、祖師堂の弘法大師、理源大師像【図37 (29)】は延宝元年（一六七三）の造立であることが、各像の銘文から知られ、いずれも江戸時代彫刻として優れた出来栄を示している。

醍醐寺の彫刻は創建期である平安前期のものと、充実期にあたる平安後期、鎌倉期のもの、復興期の桃山、江戸期のもの

のに大別される。従来の研究は主に創建期の諸像と鎌倉前期の快慶作品を中心として行なわれ、多くの知見が得られている。それ以外の平安後期の作品などについても、膨大な量の醍醐寺文書やその他の文献資料を援用しながら、製作事情の解明に努めていく必要がある。平安、鎌倉時代の下醍醐の諸像は度重なる火災などによってほとんどが失われた。一方、山上の上醍醐に造立された彫刻は戦乱に巻き込まれることが少なく、意外に多くの平安時代をはじめとする優れた作品が残っている。旧平安京内の諸大寺の仏像が今日多く失われているなかで、市中に近く、貴顕の保護を受けた醍醐寺に現存する彫刻は、各時代の彫刻史を考えるための貴重ながかりになる可能性がある。

註

1 醍醐寺の歴史については次の諸書に詳しい。

『仏教芸術』四二（特集 醍醐寺）（一九六〇年）。

佐和隆研他『醍醐寺』（『秘宝』第八卷 一九六七年 講談社）。

清水善三『醍醐寺』（『美術文化シリーズ』（一九七四年 中央公論美術出版））。

佐和隆研『醍醐寺』（一九七六年 東洋文化社）。

大隅和雄『聖宝理源大師』（一九七六年 総本山醍醐寺寺務所）。

『日本古寺美術全集』一四 醍醐寺と仁和寺・大覚寺（一九八二年 集英社）。

二年 集英社）。

佐伯有清『聖宝』（一九九一年 吉川弘文館）。

藤井恵介他『醍醐寺』（日本名建築写真全集）九 一九九二年新潮社。

2 醍醐寺の彫刻に関するまとまった展覧会カタログに次のものがある。

『醍醐寺密教美術展』（東京国立博物館特別展 一九七五年 日本経済新聞社）。

『醍醐寺展』（一九八九年 日本経済新聞社）。

3 西川新次「聖宝・会理とその周辺」（『国華』八四八 一九六二年）。

丸尾彰三郎他編『日本彫刻史基礎資料集成平安時代重要作品篇』五（一九九四年刊行予定 中央公論美術出版）。

副島弘道「醍醐寺木造大威徳明王像」（『美術史』一二三 一九八八年）。

4 中島俊司編著『醍醐雜事記』（昭和六年初版、同四十八年再版 総本山醍醐寺）。

5 佐和隆研「醍醐寺五大明王彫像について」（『美術史』二五一 一九五七年）。

佐藤昭夫「醍醐寺 五大明王像」（『国華』一〇七六 一九八四年）。

副島弘道「醍醐寺靈宝館の木造五大明王像」（稻垣栄三編『醍醐寺の密教と社会』一九九一年 山喜房仏書林）。

6 副島弘道「醍醐寺木造千手観音立像の造立について」（『美術史』一三〇 一九九一年）。

7 『昭和六十一、六十二、六十三年度科学研究費補助金（総合研究 A）研究成果報告書 醍醐寺の密教法会と建築空間に関する総合的研究』（研究代表者稻垣栄三 一九八九年）。

8 津田徹英「醍醐寺如意輪観音像考」（『美術史』一三二 一九九二年）。

9 藤田経世「醍醐寺吉祥天造立願文」（『画説』六三 一九四二年）。

この紙本墨書大治五年上醍醐薬師堂吉祥天像供養願文案は昭和六十一年に民間から購入されて国所有となった。

10 『解説版新指定重要文化財』三彫刻（一九八一年 毎日新聞社）。

11（註7）前掲書。

伊東史朗「醍醐寺炎魔天坐像と瞳嵌入」（『MUSEUM』四七四 一九九〇年）。

12 文化庁文化財保護部「新指定の文化財」（『月刊文化財』三一〇 一九八九年）。

13 益田佳苗「醍醐寺伝法学院不動三尊像と大講堂不動明王像」（平成五年度跡見学園女子大学提出論文 一九九三年〈未公刊〉）。

14 赤松俊秀「快慶作の弥勒菩薩像」（『大和文華』四 一九五一年）。

毛利久「醍醐寺の快慶作像」（『仏教芸術』四二 一九六〇年）。

副島弘道「醍醐寺三宝院本堂（弥勒堂）の弥勒菩薩像」（『醍醐春秋』二一 一九九三年）。

15 赤松俊秀「三宝院の快慶銘不動明王坐像」（『史迹と美術』一二二 一九九一年）。

（註14）毛利久前掲論文。

16 『醍醐寺新要録』（一九五一—五三年 京都府教育委員会）。

醍醐寺文化財研究所編『醍醐寺新要録』上・下（一九九二年
法蔵館）。

17 この十一面観音像は、中野楚溪編『京都美術大観 彫刻』下（一

九三三年 東方書院）に紹介されたことがある。

18 （註10）前掲書。

19 佐和隆研『醍醐寺』（一九七六年 東洋文化社）。

20 佐和隆研「醍醐寺古文書、聖教調査の足跡」（『研究紀要』一

九七八年 醍醐寺文化財研究所）。

（註7）前掲書。